



山並みが海岸線にまで迫る港町ベルゲン



ノルウェーが誇る大作曲家グリークの家

目]。ホテルから歩いてすぐの港は朝市で賑わっています。新鮮な採れたての魚介類が並ぶ中、早速茹でたての海老を頬張り、朝食前のつまみ食い。朝食後は16世紀に活躍したハンザ商人たちの生活や仕事を伝えるハンザ博物館へ。館内は中世の雰囲気あふれる家具や装飾品で商人の事務所や住居を再現しており、ハンザ同盟

時代の活気がそのまま。ハンザビールのラベルでおなじみの乾燥タラなども当時のもので、展示品ひとつひとつに物語を感じます。ハンザ博物館周辺の木造の家々もユネスコ世界遺産に登録されています。午後からはベルゲン郊外の美しい自然に囲まれたグリークの家へ。19世紀、オスロやコペンハーゲンで活躍した作曲家エド

ワード・グリークが40代以降を過ごしたヴィクトリア風の白い家が、フィヨルドを見下ろす丘に建っており、すぐ近くには作曲に使った小屋や夫人とともに埋葬されている岩間の墓もあります。ベルゲンでのお勧めはフロイエン山からの眺望。眼下には縦長の可愛らしい切妻壁の



北欧神話の妖精トロール

木造建築がびったりとくっつきながら整然と並んでいます。その先にはボーゲン湾、そして北海に昇る大きな太陽が見事です。山頂の公園ではケーブルカーから降りてくる旅人をトロールが歓迎しています。トロール(Troll)は、北欧神話の中で『霜の巨人』と呼ばれた巨人の一族だと言われています。この巨人達が時代と共に小さくなり、トロールという小人の妖精となりました。小人としてのトロールは、人間の子供くらいの身長と言われ、酷く醜く、背中に大きなこぶを持ち、鼻が長く、鉤のように曲がっているとも、腰まで垂れ下がっているとも言われています。さらに長い牛のような尾を持っています。ちなみに皆さんがご存じのフィンランドの作家トーベ・ヤンソン作の童話に登場する2本足で立つカバのような妖精「ムーミン」もトロールなのです。

いよいよ3日間のフィヨルド観光。初日は雄大なフィヨルドを満喫できるロフトフース・ハルダンゲル・フィヨルドハイキング。雄大なハルダンゲル・フィヨルドのもと、川や山々、滝の落ちていく音などの大自然や、ノルウェー国内の1/5に相当する約40万本が植えられている果樹園などののどかな風景を楽しみながらのハイキング。途中、リンゴ畑ではたわわに実るリンゴを失敬して摘み食い。ホテル周辺に延びる



のどかな風景を楽しみながらのフィヨルドハイキング



「陸のフィヨルド」を巡るフロム鉄道



ソグネ・フィヨルドクルーズ

ハイキング・トレイルは初心者向きで、山と海の眺めを一度に楽しめる散策コースです。宿泊したフィヨルドに面する「ウーレンスヴァン・ホテル」では毎週火曜日の夜にギリクのピアノコンサートが催されます。ホテルのオーナーのご先祖がギリクのパトロンであったことから、いまでもコンサートが続いているのだそうです。

翌日は、長さも深さも世界一のソグネ・フィヨルドへ。オスロからバルゲンを結ぶ幹線バルゲン鉄道は、ノルウェーで最も風景の美しい路線として人気があり、途中のミュールダールー

フロム間を山岳鉄道、フロム線が結び、フィヨルド観光に利用されています。崖にへばり付くように走る列車は、落差 93m のヒョースの滝で臨時停車するので、シャッターチャンスをお逃すことはありません。ノルウェーには無数のフィヨルドがありますが、その中でも最大を誇るのがソグネ・フィヨルドです。長さ 200km、最深部の深さは 1,300m のソグネ・フィヨルドは、美しさにおいても「最美」と言われています。奥部のフロムからグドバンゲン間をフェリーでクルージング。このあたりは複雑なソグネ・フィヨルドの支流の中でもアウラン・フィヨルド、



山頂に建つホテルからの眺望



一枚岩ブレイグ・ストーレン

ネーロイ・フィヨルドと呼ばれている地域で、波のない静かな海にくっきりと映る険しい山々、山頂から海面まで落ちる無数の瀑布など、次々に視界に入ってきます。2時間強の船旅もあつという間の楽しさでグドバンゲンに到着。下船後山頂へ登ると、迫り来る雄大なパノラマに圧巻されることは間違いなく、自然と一体化する感動をおぼえます。ちなみに絶景と言えば、『神父の説教壇』と呼ばれる断崖ブレイグ・ストーレン。今回は訪れませんでした。リーセ・フィヨルドのブレイグ・ストーレンはフィヨルドから直立する604mの一枚岩で、ガイドが言うにはその上から覗き込む眺めはとて言葉にはならないとのこと。

フィヨルド観光最終日は、シュタインフィヨルド湖とティーリーフィヨルド湖に立ち寄りながら首都オスロまでのバスの旅。ボルグンドで途中下車して1150年頃に建造されたスターブ式教会を見学しました。ボルグンドにあるスターブ式教会は、ノルウェー全土に39残るうちで最もよく保存されているものと言われおり、使徒アンデレに捧げられた教会だそうです。



使徒アンデレに捧げられたスターブ式教会



ヴィーゲランの塑像の数々を展示するフログネル公園

深く入り込んだオスロ・フィヨルドの懐深くに首都オスロ[2都目]の端整な街並みが広がっています。オスロの中心部から15分ほどの場所に位置するフログネル公園は、旅行者のみならず地元の家族やカップルたちの憩いの場でもあります。園内に入り大きな菩提樹や階段の両側にある花壇を眺めたその先には、なんとも奇妙な格好をしたブロンズ像が立ち並んでいます。赤ん坊から老人，男女関係なく立ち並ぶその像は、表情豊かな顔も特徴的ですが、体全体で喜怒哀楽を表現しており、どの像も個性豊かで、折り合うように何十体も重なった人体像のひとつひとつに生命力と躍動感を感じます。650体以上あると言われる人体像は、人生の縮図や輪廻、宇宙的なものを感じさせますが、作者のグスタヴ・ヴィーゲランは一切作品の解説をしていないというから、イマジネーションを掻き立てます。国立美術館は1836年に創設されたノルウェーで最大の美術館です。2階のムンクの部屋で「春」「叫び」「マドンナ」などの代表的な作品を間近で鑑賞すると、圧倒的な表現力を見せつけられ、エドヴァルト・ムンク独特のダイナミズムが感じられます。その他にもマティス、セザンヌ、ドガなどの絵画、ロダンやマイヨールの彫刻、ロシアのイコン収集など、国



ムンクの傑作「叫び」

内外の芸術家たちの作品を広く展示しています。ノルウェーは言わずと知れたバイキングの故郷であるため、市内観光の最後はバイキング船博物館でした。



市庁舎のレストラン「スタッズヒューズ・シェラーレン」

第二の訪問国は、洗練された美しさ故に『ガラスの貴婦人』と喩えられる国“スウェーデン”。オスロから空路約1時間、ノーベルをはじめ多くの科学者を輩出した文化国家スウェーデンの首都ストックホルム[3都目]に。

到着後はフォーマルな服装(男性はジャケットとネクタイ着用)に着替えてのノーベルディナーです。ノーベル賞授賞後の晩餐会が行われる市庁舎内レストランの「スタッズヒューズ・シェラーレン」で、2001年に野依良治氏が化学賞を受賞したノーベル賞授賞晩餐会メニューと同じ食事を試しました。

2002年には前年の野依良治氏に続き田中耕一氏と小柴昌俊氏の2人の日本人がノーベル賞を



野依良治氏のノーベル賞授賞晩餐会メニューの
メインディッシュ

《[メニュー] ロブスターとカリフラワーの芽 ランゴスティン(ウミザリガニ)のゼリー寄せとコーラルサラダ添え、ノーベルブレッド♠ ♣ うずら肉の鴨のレバー詰め 栗茸のラグー、ドライトマト、フレッシュグリーンアスパラガス添え マデイラ風ソースとチャービル(パセリ)ピューレ♣ ♥ バニラアイスクリームとブラックカラントパフェ、メレンゲ、キャラメルビスケット添え♥ ♦ シャンペン、ワイン、コーヒー、ミネラルウォーター♦ 》

受賞しました。野依氏に出されたメニューと同じものを食べながら、娘がひと言「すごく美味しいね。来年も来て田中さんと小柴さんに出された晩餐会メニューを食べようよ」と…。

ノーベルディナーの翌日は市内観光。まずは昨夜のディナーに訪れた市庁舎を見学。この建物を設計したのはスウェーデンで最も名高い建



ノーベル賞授賞式後の晩餐会が行われる市庁舎



王宮の衛兵

築家ラグナール・エストベリで、建築には12年の歳月を要し、1923年に完成しました。この建物には800万個の赤いレンガと、1,900万個の金メッキ・モザイク・タイルが使用されています。なかでも「黄金の間」は金箔をガラスでサンドウィッチしたモザイクが贅沢に施されています。毎年12月にはノーベル賞受賞者の祝賀パーティーがここで開催されます。王宮はヨーロッパで最も大規模な宮殿のひとつで、現在

もここで王による執務が行われています。現在の宮殿は1760年に建造され、今も大使の任命や国賓の接待などに使われます。王宮では「衛兵交代式」を見逃せません。しゃんとした衛兵たちの姿に思わずつられてこちらまで背筋を伸ばしてしまいます。ストックホルムの中心街はメーラレン湖に浮かぶ20もの島々から成り立っています。その中でも「ガムラ・スタン」と呼ばれる小さな島がスウェーデンのハートで、市の多くの人気スポットが密集しています。旧市街の「ガムラ・スタン」はストックホルムの生きた博物館とも言われ、曲がりくねった小路や石畳に過ぎ去った中世の「黄金期」が感じられます。ここはただ古色あふれる佇まいだけでなく、小洒落たカフェやお土産屋さんなどもあり、散策するにはもってこいのスポットです。午後からは風光明媚なメーラレン湖のクルーズを楽しみながらメーラレン湖に佇む世界遺産のドロットニングホルム宮殿へ足を運びました。白鳥が浮かぶ湖と深い森に囲まれたクリーム色の華麗な建物はおとぎ話に出てくる宮殿そのもの、バロック式と英国式の庭園の美しさも圧巻です。『北のヴェルサイユ』の異名を持つドロットニングホルム宮殿は、現在も王室の方が居住され



メーラレン湖の遊覧船から眺める北欧の水の都



「北のヴェルサイユ」の異名を持つドロットニングホルム宮殿



バルト海を航海する豪華客船「シリヤライン」



ムーミンと一緒に記念写真

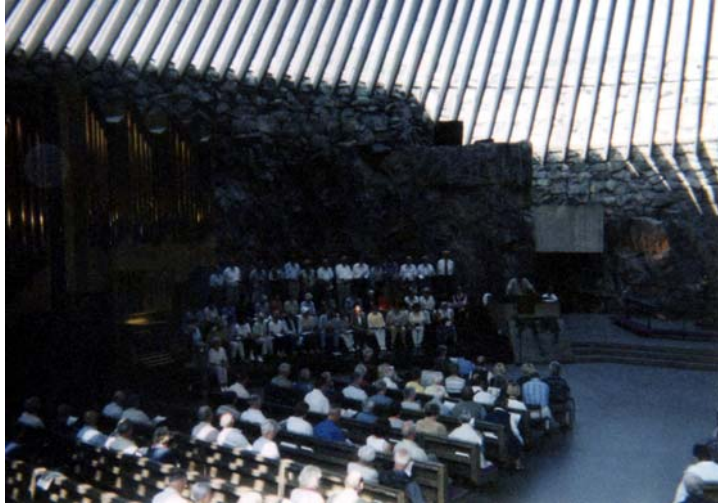
ていますが、部分的に一般開放されているので、暫しの間優雅な気分になりました。

対岸にあるフィンランドへは海路で。バルト海を航海する「シリヤライン」は、全長 203m, 58,000トン, 980 の客室に 2,800 人以上を収容で

きるスカンジナビア屈指の豪華客船です。「シリヤライン」の自慢は、個性豊かなブティックやレストラン、カフェ・バーなどが集まる国際色豊かで華やかなムードただよう 140m にもおよぶプロムナード。乗船時には「ムーミン」が迎えてくれるので子供たちは大喜び。娘も「ムーミン」と一緒に笑顔で「はい、ポーズ」。1泊ながらも大型豪華船でのゴージャスな船旅を楽しみました。

最後の訪問国は、森と湖の国“フィンランド”。この国の自然は間違いなく美しく、そしてここには木の生活文化が根付いています。

下船後はフィンランドの首都ヘルシンキ[4都目]の市内観光。マーケット広場、シベリウス公園、ウスペンスキー大聖堂、オリンピックスタジアムなどを観光しましたが、特筆すべきは自然の岩盤をくりぬいて作られたテンペリアウキオ教会です。この教会はロックチャーチと呼ばれているように、岩の中にスッポリと隠れているので、うっかりすると見落としてしまいます。できる限り岩を自然な形に保とうという主旨のこの教会は、設計競技によって作品が選出され、1969年に完成しました。天井の周囲を円形に切りとったガラス窓からの光線がむき出しの粗い岩肌を柔らかく照らし出し、自然のふとこに抱かれたような落ち着きを感じさせてく



自然の岩盤をくりぬいて作られたテンペリアウキオ教会

れます。

フィンランドと言えば、サウナとサンタクロース。そこで娘と本場のサウナに入り、旅の疲れを癒してリフレッシュ、そして留守番の息子へは、お土産屋さんでクリスマスに届くサンタクロースからのクリスマスカード(日本語)を手配しました。

北欧諸国での代表的な料理と言えば「スモーガス・ボード」。この料理は北欧の味を一度に楽しめるバイキングスタイルの食事形式が一般的です。その昔、バイキングが遠征先で占領した村々の食べ物を集めて大きなテーブルにのせ、自由に取って食べたことから始まったという説があります。まずニシンの酢漬けから始まり、冷たい魚や小海老、温かい魚料理に冷たい肉料

理、そして温かい肉料理や野菜、卵料理を終えたら最後にデザートを食べるとするのが正しい「スモーガス・ボード」の食べ方です。また、一度取ったものは決して残さないことが作法とされるので、少しずつ取っては何度も皿を取り替えることがポイント。北欧旅行の際には是非ともお試しを。

待ち望んだ夏の到来、北欧の国々が太陽の光をいっぱいに浴びて輝く季節、人々は長い冬眠から覚めたように活発になります。次々と現れる洗練された街並み、新緑に映える水面、夕食後も続く薄暮の時間帯など忘れ難いものばかり。あふれる自然がいちだんと鮮やかさを増すこの季節にスカンジナビア半島を旅してみませんか。